

てもらおうのもよいかもしれませんが「図7」。両者の違いを通して、東西の音階の違いについて学んだりできるのではないのでしょうか。視覚的な刺激は理解を進めるのにもきつと役立つはずですよ。

内容によっては、地域教育にも活用することが可能でしょうし、和本に用いられた和紙は江戸時代には全国的に生産されていましたので、身近な産地について学んでみるのもよいかもしれません。全国手すき和紙連合会のホームページで公開されている、「全国産地マップ」は参考になります。

保存されている内容が多岐にわたっているのも、どんな教科でも何らかの接点を見つけていることはできるのではないのでしょうか。あまり限定して考えず、教える側も和本に親しみながら、楽しく教材として使えそうなものを見つけていけばよいのではないのでしょうか。

5 おわりに

和本は日本の貴重な文化資源です。日本ほど古い書物が豊富に存在する国は他にないのです。書物は文化のタイムカプセルであり、保存された文字や絵画の情報だけでなく、物質としての存在自体に非常に膨大で多面的な情報が保存されているのです。そのことを理解することは、子どもたちの将来の仕事や学問、あるいは生活において、きつと役に立つはずですよ。授業の教材として和本に触れることは、その教科の学習意欲や探求心を増すことはもちろんのこととして、人として幸福に生きていくための知恵を育てることもつながるのではないのでしょうか。日本の書物文化を知っていることが、国際社会で活動する上で役に立つことは、私が身をもって経験しています。

和本は日本の教育を楽しく豊かにし、ひいては日本の社会や文化に憩いや潤いをもたらす存在だと確信しています。どうぞそのポテンシャルを存分に引き出してみてください。

実践1

貴重書出前授業が伝えてくれたこと

 近江弥穂子（横浜市立あざみ野第一小学校）

1 はじめに

体験することが少ない今の児童にとって、学習する際に自分事として捉えたり、自分に近づけて考えたりすることはなかなか難しいのが現状です。授業支援で、模造紙で作った巻物を児童に紹介しながら、「ここで本物の巻物を児童に提示することができたら」と常々思っていました。くずし字の授業支援でも、写真ではなく、くずし字が書かれている実物が目の前にあれば教育効果が大きいのではないかと考えていました。そんな折、普通であればガラスケース越しでしか見ることができないよう

な和本に児童がじかに触れることができ、また「解体新書」などの貴重書を間近に見られる授業が鶴見大学からのご支援で可能となりました。これは児童にとって得がたい体験となり、大きなチャンスでもあります。ここでは国語のくずし字の学習と貴重書出前授業についてご紹介させていただきます。

2 くずし字学習について

横浜市では六年生で、「仮名の由来」という一時間の単元でくずし字の学習をします。この単元では、①仮名の由来、特質などについて理解することができ、②先人たちが工夫を重ね継承してきた文字や表記を児童たちが大切に考え、未来に伝えていこうとする態度を持つことができ、③の二点が指導目標です。実際、学習後の児童の感想には、「自分の名前をくずし字で書くのが面白かった」、「由来が知れてよかった」、「読めて、意味がわかりそうで、なんかかっこいいと思う」等がありました。授業後にはテストも含めて自分の名前をくずし字で書く児童もいたようですが、指導目標の②にあるよう



最初に説明を受けている様子



一枚ものブースで分／間
懐宝御江戸絵図をみているところ



卷子本の見方を教わっているところ

なところまではなかなか難しいのが現状です。

しかし、ここで教科書の写真ではなく和本に触れる機会があれば、子どもたちの感想は大きく変わるのではないのでしょうか。和本の実物は、和本バンクも利用できずし、学校図書館に和本を所蔵するというのもよいかと思います。例えば首都圏では、神田等などの良心的な古本屋さんで五〇〇円ほどから和本を購入することができます（通信販売も可能です）。また、興味をもったタイミングで、古典教材を提示できれば、子どもたちは意欲的に取り組むことができ、古典が苦手と思う前に「楽しい」という記憶を手に入れることができるのではないのでしょうか。そして、大学や博物館など他の教育機関との連携も大変有効な手段となります。

3 鶴見大学貴重書出前授業について

私がこの出前授業に出合ったのは、二〇一五年に鶴見大学の図書館で開催された学校図書館大交流会です。会の終わりに、貴重書出前授業の紹介と次年度の訪問先を募るといってお話を伺いました。当時勤務していた学校は

六年生が六クラスでしたので、大規模校の実践例としてなんとかご訪問いただけたいかと手をあげたのがご縁の始まりです。そして二〇一五年から一七年までは横浜市立森の台小学校にて、二〇一八年から一九年は横浜市立藤が丘小学校にて、五年にわたり実施、コロナ禍で中止となりましたが、今年度（二〇二二年度）、当校で三年ぶりに実施できました。

出前授業を効果的に実施するためには、児童に身につけさせたい力を大学と小学校の間で共有し、児童の実情に合わせて授業の内容をコーディネートしていくことが必要です。最初の年は、大学の方に事前に小学校に来校していただいたり、私も大学図書館に赴き、実際に貴重書が所蔵されている場所を拝見したりして、大学の方と何度か打ち合わせをしました。児童がすべての和本にあたるよう、大きな教室を確保し、見る本（貴重書）とさわる本（和本）に分けてブースを計八つ設置し、各ブースに大学側より担当者（大学院生など）を配置いただき、説明や質疑応答していただくことにいたしました。児童は八班に分かれ、一ブースは四分程度とし、班ごとにす

べてのテーブルを回ります。また、百人一首、地名、鉄道や幽霊など児童が関心をもちそうなテーマをお伝えし、他には、横浜市では吉田新田の学習をするので古地図をぜひにと依頼しました。そして卷子本のテーブルを設置し、全員が卷子本を使って見方を体験できるようにお願いしました。その結果、見る本としては、解体新書・御成敗式目・パピルス・クレイタレット・横浜近辺の古

地図・奈良絵本・羊皮紙・与謝野晶子直筆原稿などを、さわってみる本には、卷子本・写本・近世版本・絵入り本・一枚物・量物・近代版本・活版本・近代新聞雑誌・銅板鉄道路線図、百人一首等などをお持ちいただくことになりました。和本作りは、事前に担任の先生方に和本を実際に作ってもらい、当日は教室で担任主導にて行うことになりました。

課題は短い時間でいかに児童がその場にあるものを吸収できるかです。担任の先生方と相談して六年生全体で事前に予習授業を行いました。鶴見大学からの資料をもとにスライドで児童に趣旨を説明し、本の形態の変遷、紙・文字・書物等の日本への伝来の歴史、写本と版本、当日見る和本、実際に和本が所蔵されている様子等をそれぞれ紹介しました。その和本が写本なのか版本なのか、読めるところはあるか等、当日考えてみてほしいことも伝えました。こうして事前学習をすることで、児童が出前授業に向けて心の準備ができるようになりました。

実際に行われた一クラス二時間の出前授業ですが、一時間目は大学の先生のお話を伺い、手を洗ってから、実際に貴重書を見たり和本をさわったりしました。児童は和本や羊皮紙の手触り、匂いに驚き、卷子本では開く時に生じるミシミシする音やその手触り、巻く難しさを体験できました。虫が紙を食べることに驚いていました。百人一首の中で覚えている句を探し、読もうとする姿も見られました。いずれのテールでもなんとか読もうとする姿と、読めた喜びを感じている様子でした。書写と

かったことが、和本に触れることで子どもたちにとって身近な存在になったのは間違いありません。苦手だと思っていた歴史が好きになったというコメントもありました。貴重書という時を超えてきた存在から歴史をじかに感じ、昔の人が今日まで守り伝えてきたことを目の当たりにすることで、自分たちも「知りたい」「大切にしたい」と思うことができたのです。こちらが意図したこと以外にも子どもたちはそれぞれの視点でたくさんのご感想を感じていました。今後、中学校で向き合う古典や歴史などにも苦手意識を持たずにあたれるようになると思います。実際、中学生になって歴史を学んだ際に、「六年生でみたあれはこれだったんだ」と、出前授業の経験について話っていたと保護者の方に伺いました。また、学校に出前してもらえらることで、五年生以下の児童も六年生の担任以外の教職員もインスパイアされました。そして、普段接する機会のない大学の教職員の方や大学院生がじかに質問に答えてくれる体験も貴重で、児童のキャリア教育にもつながる可能性があります。

版画の経験から、写本や版木の字の細かさに、ただただ、「昔の人の技術や才能がすごい！」と驚いていました。二時間目は、和本（粘葉装）作りです。和紙に塗る糊の量の加減が難しかったり、ページの順番を逆にしたりまったりする姿も見られました。

出前授業後の児童の感想には、「貴重書を読むことは昔の人の生活や思いを紐解くことだと思った」、「歴史は好きではなかったけど、もっと昔の本や歴史について調べたい」、「昔の本はこんなにも美しくて繊細な技術を使って作られたものだと思った」、「災害や戦争もあったけど昔からずっと大切にしていって今日に伝えてくれる人がいたからこそ見ることができると改めて実感できた」、「昔の本を大切に残していきたい」、「和本作りを昔の人の気持ちになってやってみることができました」などがありました。

4 貴重書出前授業を通して言えること

実物の紙の質感、色合い、風合い、匂いは資料集では味わえないものです。自分事として捉えることが難し

5 おわりに

昔の人が書いたものに触れた！ 読めた！ という経験は児童にとって大きな感動です。感動は心を動かします。小学校でこそ、和本を見て、触れることのできる経験は歴史や古典への興味を深め、何より次の学びへの大きな原動力につながると言えるでしょう。他の教育機関との連携や、自校の学校図書館に和本を所蔵する、手軽に使える古典教材を利用する等、和本に触れたり、くずし字を読んだりする方法はさまざまです。学校図書館は人と資料をつなぐ場所でもあります。先生方の「授業ですぐ使いたい」、「やってみたい」に応えられるよう、児童が興味をもったタイミングでそれらを効果的に提供できるよう、これからも尽力していきたいと思えます。